

いわき湯本温泉ブランド戦略会議



Let's think together

いわき湯本の再生に向けて



○お問い合わせ 都市計画課都市再生係 ☎22-7513

本年10月、常磐地区の市街地再生に向け「常磐地区市街地再生整備基本計画」を策定しました。同計画の取り組みを進めるには、常磐地区を魅力ある温泉観光地としてブランド化する視点が大切ですが、これからの取り組みは行政だけでは解決できません。市民の皆さんと一緒に、これからのまちを考えていくため、現在いわき市では専門家を交えたいわき湯本

ンスは必要になります。私は、観光客を活用する視点でまちを考え、まちが活発になることで観光客がさらに訪れるといった、良い循環を生み出していくことが大切だと考えています。互いに手を差し伸べながら、良い意味で利用し合うような関係を作っていきたいです。また、このまちの歴史は古く、炭鉱で栄えた時代を経て、新しい文化としてフ



「あとち」で遊ぶ子どもたち

温泉ブランド化戦略会議を行っています。10月21日に行われた第一回目の戦略会議では、メンバーの湯本への熱い思いが語られました。

オール湯本で稼ぐまちをつくる

「オール湯本で稼ぐまちをつくる」は、湯本を「稼ぐまち」に変えていくことを大切に考えていきたいと思っています。今後展開するさまざまな取り組みを全て「稼ぐ」

につなげていきたい。観光客の皆さんは、その場所でお金を使いたいと考えるので、お金を使える場所や買いたいと思うもの、行きたい場所を作っていくことが大切です。一方で、観光地と地域の方々にとつての快適なまち、双方の絶妙なバランスを取りながら考えていく必要があります。また、重要なのは、この戦略会議に参加する我々は、まちの皆さんをサポートす

和魂洋才の気持ちで湯本を創り上げる

奥川 このチームは、湯本をブランド化していく大事な使命を背負っており、私は、ブランドを創り上げていく過程で森鷗外の言葉「和魂洋才」の思いを持ち続けなければいけないと思っています。

ラが根付きました。この時代背景をしっかりと認識し、我々も湯本の歴史を刻む一員なんだということを、特に私たちのような外の人間が意識しなければいけないと思っています。今後の検討では、何をやるかという事よりも、その場所でのような活動や光景を作っていきたいのかをしっかりとイメージしながら具現化していくことを大切にしていきたいです。

▲稼ぐまちにするための考え方を話す 渡部座長

▲いわきの新しい文化として根付いたフラ (本年7月開催海開き式より)



この場所には古くからの文化と歴史を持つ「温泉」と新しい文化の「フラ」が共存しています。和の魂(温泉)を込めながら、洋(フラ)の良いところを組み入れるという気持ちでプロジェクトを進めていくことが大切だと思っています。湯本のブランドを創ることが、まちの皆さんのプライドにもつながっていくものと考えています。地域の皆さんの思いや記憶をしっかりと踏まえて精いっぱい頑張ります。

まちの住民の思いを込めたまちづくりを

小泉 じょうばん街工房21では長年、湯本の駅前をどのようにしたら良いかと考



え、地域の皆さんとワークショップを開催し、将来のまちのイメージを描いてきました。駅前には温泉をより感じられるものが必要だと思っています。温泉で稼ぐ仕組みを構築しながら、常磐地区全体に良い効果を与えられるように考えていきたいです。

今後進めていく事業は、まちなかに人のにぎわいを創るために展開されるものになりますので、ハード事業と併せて、沿道のお店の魅力づくりや、出店意欲を高める取り組みも考えていきたいです。

薄羽裕一
いわき湯本温泉旅館協同組合理事長。いわき湯本温泉で旅館業を営んでおり、長年にわたり地区のイベントやまちづくりに携わる。



小泉智勇
地区まちづくり団体のじょうばん街工房21会長。長年にわたり、地区のにぎわい創出やまちづくりに携わり、地区の先導的な役割を務める。



奥川良介
日本工営都市空間(株)勤務、大阪芸術大学芸術学部建築学科非常勤講師。全国各地の公園などの屋外空間のランドスケープ設計などを手掛ける。



滝口聡司
(株)aptp、(有)アパートメント代表。一級建築士として地域ブランディングを手掛け、まちづくりコンサルタントなど多方面で活躍中。



渡部祐介
トコナツ歩兵团団長。まちづくりプロジェクトのプロとして、ソフトからハードまで一貫したブランディングを手掛ける。本戦略会議座長。



戦略会議メンバー

日本一の温泉観光地
を目指して

薄羽 私自身、このまちで生まれ、このまちで旅館を経営しています。

昔の写真などを見ると、このまちは本当に活気があり、こんなに人が来ていたのかと驚きます。全国的にも県内有数の温泉地だったのだらうと思います。時代の流れなどもあるのですが、残念ながら現在では選ばれる温泉地にはなっていないと感じています。

まちの皆さんと昔の話をすると、とても楽しそうに話をしてくれます。まちに誇りを持ち、このまちが好きなんだと感じる瞬間です。

今回の取り組みを通して、もう一度、昔のように活気あるまちをつくり、選ばれた温泉地にしていかなくては、この先の未来は無いらうとさえ思います。どうせやるなら日本一の温泉観光地を目指したいと思います。



常磐地区市街地再生整備基本計画に位置付けた9つの取り組み

- ①交流拠点施設・駐車場整備事業
- ②湯本駅前街区再編・駅前交通広場整備事業
- ③湯本駅前緑地・御幸山公園整備事業
- ④市営住宅天王崎団地跡地利活用事業
- ⑤にぎわい再生事業
- ⑥観光地域づくり事業
- ⑦滞留拠点整備事業
- ⑧魅力ある街並み空間整備事業
- ⑨公的不動産利活用事業

※同計画について詳しくは市ホームページをご覧ください。



リレートーク 304

今回は常磐地区の市街地再生に取り組むいわき湯本温泉ブランド化作戦会議のメンバー5人に、常磐地区の魅力や将来像についてインタビューした内容をお届けします。

◆質問

- Q1. 常磐地区の魅力は？
- Q2. どんなまちになってほしい？

◆回答

渡部さん

A1. 温泉、炭鉱、フラ。そして、明治維新、温泉の枯渇、エネルギーの転換、東日本大震災という危機を、幾度となく乗り越えてきた湯本の人たちの明るさ。

A2. 温泉とフラを中心にした日本でここにしかない、のんびりと飲んで・食べて・遊べる、地元の人もゲストも楽しめるまち。

滝口さん

A1. 温泉、炭鉱、フラを作り出した人々のエネルギー。歴史を尊重しながらも新しいことにチャレンジするイノベティブな精神。

A2. 他の温泉街にはない湯本ならではの「らしさ」を感じる事ができるまち。地域の人々が誇りに思う「らしさ」こそが、先の読めない時代において大切な要素。

奥川さん

A1. 千年を優に超える歴史性に、炭鉱やフラという、異なる特色が重層していること。常磐地区をパワフルに動かそうとする多彩な人材の人間味あふれるユニークさと優しさ。

A2. 程よいにぎわい、没入感のある雰囲気、ユニークさ、居心地の良い空間や施設が適度に共存する「行きたくて行きたくて仕方ない、いわき湯本」。

小泉さん

A1. 多種多様な方が多く、バラバラのようでもいざとなればまとまれる。謙虚で恥ずかしがり屋が多いが、一度仲が深まれば非常に人情深い。人情あふれるまちが最大の魅力。

A2. 湯本温泉のポテンシャルを生かし、他のどの温泉街よりも魅力的で、いわき市民の観光の宝として湯本温泉が愛される地区になってほしい。

薄羽さん

A1. 常磐線沿線の唯一の温泉地で、都会の方から見てとても近い温泉地だということ。リピートされる温泉地としての魅力を発信していきたい。

A2. 観光客がお金を使いたくなる魅力ある温泉地。自立した持続可能なまちとして「人・モノ・経済」が好循環できるようなまち。